

〈資料〉

第二次沖縄民事陪審裁判（１）*
—1965年秋の訴訟記録—

齋藤 哲（訳）
（代表執筆者・陪審裁判を考える会）**

This paper is a translated version of the second civil jury-trial record in the occupied Okinawa, Japan, in July 1965.

Research Group on Jury Trial

* 本件記録は1965年7月10日に下された民事陪審裁判（本稿では、これを「第一次訴訟」と呼ぶ）の第二次訴訟にあたる訴訟記録の翻訳である。いずれも原本は琉球大学の図書館にある。

第一次訴訟については、〈資料〉「沖縄の民事陪審—記録から見た庶民の力—（１）～（５・完）」として、獨協法学第107号（2018年）、同第108号（2019年）、同第109号（2019年）、マテシス・ウニヴェルサリス第20巻第2号（獨協大学国際教養学部、2019年）、同第21巻1号（2019年）に掲載した。

本件訴訟の発端は、1959年11月30日午後1時ころ、沖縄県島袋所在の県道において、建設会社勤務の従業員が会社所有のピックアップトラックを無断で運転走行中、水道の補修工事中の作業員を衝突死亡させたことにある。

そのため、被害者の配偶者及び未成年の子が、加害従業員とその雇用者である会社を被告として訴えを提起したところ（第一次訴訟）、総額6万5千ドルの賠償命令が下され確定したが、被告会社は支払いを拒絶した。本件は、第一次訴訟の原告らが改めて、第一次訴訟の被告会社と保険契約を締結していた保険会社と保険協会とを相手方として、賠償金の支払いを求めた訴訟事件である。

なお、本文中にあるチョウヘイ・トミシロは仮名である。

** 本資料の翻訳は、荒川歩（武蔵野美術大学）、飯考行（専修大学）、黒沢香（元大学教授）、四宮啓（弁護士・國學院大学）、滝田清暉（特定侵害訴訟代理人・弁理士）、新倉修（弁護士・青山学院大学）、西村健（弁護士）、齋藤哲（弁護士・獨協大学）による。いずれも陪審裁判を考える会の会員である。

<目次>¹

1 陪審員選定手続 (Jury Selection)

(1965年10月25日月曜日午前9時50分：開廷。陪審員候補者48人と訴訟関係者ら在席)

(同日午前11時07分：休憩)

(同日午前11時17分：再招集)

(同日午前11時45分：休憩)

(同日午後1時15分：再招集)

2 正式事実審理 (Trial by Jury)

(1) 陪審員の宣誓 (Oath by Jury)

(2) 冒頭説示 (Preliminary Instructions)

(3) 冒頭弁論 (Opening Statement) (ヘイグッド原告代理人)

(同日午後2時30分：閉廷)

(10月26日火曜日午前9時40分：再招集)

(4) 当事者尋問 原告ツルコ・ロバーズ氏宣誓

ア 主尋問 (Direct Examination) (ヘイグッド原告代理人)

イ 反対尋問 (Cross Examination) (マクレラン被告代理人)

(10月26日午前10時18分：休廷)

(同日午前10時44分：再開)

ウ 補充質問 (Examination by the Court) (裁判所)

エ 再反対尋問 (Further Cross-Examination) (マクレラン被告代理人)

* 以上、本号

(5) 原告側証人尋問 証人チョウヘイ・トミシロ氏宣誓

ア 主尋問 (ヘイグッド原告代理人)

イ 反対尋問 (マクレラン被告代理人)

ウ 再反対尋問 (マクレラン被告代理人)

エ 補充質問 (裁判所)

(10月26日午前11時37分：休廷)

(同日午後1時30分：再開)

1 原文に目次はなく、訳者らが便宜的に作成したものである。

- (6) 原告側証人尋問 証人裁判所書記官ダルシィ・M・エリオット氏宣誓
ア 主尋問（ヘイグッド原告代理人）
イ 反対尋問（マクレラン被告代理人）
- (7) 原告側証人尋問 証人ジョージ・ホール氏宣誓
ア 主尋問（ヘイグッド原告代理人）
イ 被告代理人による限定的反対尋問（マクレラン被告代理人）
ウ 補充質問（裁判所）
エ 主尋問（再開）（ヘイグッド原告代理人）
（10月26日火曜日午後3時7分：休廷）
（同日午後3時47分：主尋問再開）
オ 補充質問（裁判所）
カ 反対尋問（マクレラン被告代理人）
（10月26日火曜日午後4時30分：閉廷）
（10月27日水曜日午前10時5分：再開）
- (8) 原告側証人尋問 証人ヘイグッド原告代理人宣誓
ア 尋問（裁判所）
イ 反対尋問（マクレラン被告代理人）
（10月27日水曜日午前10時3分：陪審員退廷）
- (9) 非公開審理
（10月27日10時40分：非公開審理開始）
（同日11時40分：休憩）
（同日午後1時0分：再開）
- (10) 被告側証人尋問（非公開審理） 証人エドワード・N・ハリマン氏宣誓
ア 主尋問（マクレラン被告代理人）
イ 反対尋問（ヘイグッド原告代理人）
ウ 補充質問（裁判所）
エ 反対尋問再開（ヘイグッド原告代理人）
オ 補充質問（裁判所）
カ 再主尋問（マクレラン被告代理人）
（同日午後2時25分：非公開審理終了）
- (11) 被告側証人尋問 証人ジョン・ベラミー氏宣誓
ア 主尋問（マクレラン被告代理人）

- (12) 被告側証人尋問 証人エドワード・N・ハリマン
- ア 主尋問 (マクレラン被告代理人)
 - イ 反対尋問 (ヘイグッド原告代理人)
 - ウ 再主尋問 (マクレラン被告代理人)
 - エ 再反対尋問 (ヘイグッド原告代理人)
- (同日午後4時30分: 休廷)
- (10月28日木曜日午前9時30分: 審理再開)
- オ 再々主尋問 (マクレラン被告代理人)
 - カ 再々反対尋問 (ヘイグッド原告代理人)
- (同日午前9時50分: 陪審解放)
- (同日午後3時5分: 非公開審理開廷)
- (同日午後3時50分: 休廷)
- (同日午後4時5分: 開廷)
- (同日午後5時8分: 休廷)
- (10月29日金曜日午前9時45分: 陪審及び訴訟関係者参集)
- (同日午前9時52分: 陪審解放)
- (同日午前10時10分: 非公開審理再開)
- (同日午前11時7分: 非公開審理休廷)
- (11月1日月曜日午前9時40分: 非公開審理再開)
- (同日午前9時55分: 終了)
- (同日午前10時: 陪審並びに訴訟関係者入廷・審理再開)
- (13) 最終弁論 (マクレラン被告代理人)
- (14) 最終弁論 (ヘイグッド原告代理人)
- (同日午前10時29分~30分: 非公式休廷)
 - (同日午前10時58分: 休廷)
 - (同日午後1時: 再開)
- 3 説示 (Instruction)
- (同日午後1時42分: 事件は陪審へ)
 - (同日午後3時5分: 陪審入廷)
- 4 評決 (Verdict)
- (同日午後3時5分: 閉廷)

原告 ツルコ・ロバーズ 等)
対) 民事訴訟 第2-65号
被告 アメリカ外国保険協会、通称「AFIA」、)
及びホーム保険会社、ニューヨーク州企業)

訴訟記録

(1965年10月25日月曜午前9時50分、沖縄・那覇にて、上記裁判を開廷。陪審奉仕のために招集された48人の候補者に加え、下記の方々が発席。)

出席者：	シリル・E・モリソン：	裁判長
	チャールズ・P・ヘイグッド：	原告代理人
	ハワード・B・マクレラン：	被告代理人
	ダルシイ・M・エリオット：	法廷書記官
	タカオ・タカガキ：	廷吏／通訳
	ドロシイ・L・ヘンネケ：	速記官

署名

シリル・E・モリソン 裁判長

裁判長： 皆さん、着席して下さい。ヘイグッドさん？

ヘイグッド代理人： はい。準備ができました。原告のロバーズさんは、今朝ちょっと具合が悪くなって、今日のこの法廷に出ることができませんが、明日の公判には出廷されると思います。彼女の代理人としてですが、原告は、陪審員を選任する手続きには出廷いたしません。

裁判長： 被告代理人は、それで問題ありませんか？

マクレラン代理人： はい、異議ありません。

裁判長： 分かりました。

皆さん、あなた方は今朝、被告アメリカ外国保険協会、通称「AFIA」、及び、ニューヨーク州企業であるホーム保険会社に対する、原告ツルコ・

N・ロバーズさん、及び未成年者のドナルド・ロバーズさんの後見人としてのツルコ・N・ロバーズさんの裁判における、陪審員候補者として法廷に呼び出されました。

呼び出された全体の中から、13人が奉仕のために選任されます。ところで、陪審員の人数は通常12人ですが、1人の陪審員が無効又はその他の理由で陪審員を続けられなくなった場合に、審理が無効となる必然を避けるために、時々、1人又は2人以上の余分の陪審員が選任されます。そこで、本事件では、裁判所は、最初に選任された12人の陪審員の内の1人が、何らかの理由で続けられなくなった場合に奉仕する補充陪審員として、1人余分の陪審員を選任します。今私が申し上げたように、通常の陪審員の人数は12人ですが、私たちは1人の補充陪審員を選任します。

すべての皆さんは、最終的に13人が選任されるまで、法廷に残っていただく必要があります。その後、残りの方々は退出を許されます。選任されなかった方々は、今朝の出廷に対する支払いを受けるために書記官に報告し、どうか、書記官が法廷から離れられるようになるまで待っていて下さい。即ち、陪審員として選任されなかったすべての皆さんは、どうか、書記官があなたにあなたの日当を支払えるようになるまで待って下さい。

この裁判は民事裁判です。私の右手にいるマクレランさんは、本件被告の代理人です。私の左手にいるヘイグッドさんは、原告の代理人です。原告は気分が優れないため本日は出廷できませんが、彼女は、明日は出廷すると思われまゝ。被告は2つの会社で、当然出廷しません。彼らの代理人であるマクレランさんだけが出廷しています。

13人の陪審員が選任され宣誓した後、陪審員には、本件に係る彼らの奉仕に関連する一般情報が与えられます。

今朝呼ばれたすべての皆さんは、起立して宣誓し、あるいは質問に答えることを確約して下さい。どうかご起立下さい。
(裁判長が陪審員たちに宣誓させた。)

裁判長： それを、あなたの良心に従った表現で通訳して下さい。(通訳が宣誓を日本語にした。)

裁判長： 結構です。どうぞご着席下さい。さて、私はこれから、あなた方に、この事案が何に関するものであるかをお話しします。原告のツルコ・N・ロバーズさんは、彼女の幼い息子さんの代理人でもあります。陸軍民間

部に勤務していて勤務中に殺害された被害者の奥さんです。そこで、争いのない建設企業である極東建設サービス株式会社、及び、故人を殺害した車両を運転していたチョウヘイ・トミシロ氏に対して、訴えが提起されました。損害賠償は全部で6万5千ドルと裁定され、判決はそれらの額を認容しました。本件の原告は、このような行為に対して極東建設サービス社が本件被告と保険契約をしていたのであるから、被告はこの判決にある6万5千ドルを支払う責務があると主張しました。原告が当該判決を得た後、本件被告は、彼ら自身の言い訳に基づいて判決通りの支払いを拒絶しました。そこで、被告に対して本件訴訟が提起され、原告に依れば疑いのない保険証券の下で、彼らの法的責任が非難されました。私は皆さんに、本件が何に対する事案であるかを理解して頂きたかったです。

書記官が、これから13人の名前を箱から選択します。名前が引かれ呼ばれたら、どうか、それぞれ私の左手最初の椅子から始まって、席の後ろの、横列の陪審員席について下さい。それぞれの陪審員は質問され、すべての陪審員は忌避の対象となります。余分の1つの席が、最後に選定されることが自然である補充陪審員のために、ほかに用意されています。書記官は最初の名前を選んで下さい。

書記官： 最初に出欠を取らなくても良いでしょうか？

裁判長： そうですね。誰が出廷しており、誰が出廷していないかを確定するために、出欠をとりましょう。

書記官： ジョージ・W・アンダーソンさん。

アンダーソン氏： はい。

書記官： テツ・アラサキさん。

アラサキ氏： はい。

書記官： ジェームス・B・ベビルさん。

ベビル氏： はい。

書記官： ジョージ・H・ブラウニングさん。

ブラウニング氏： はい。

書記官： クワイ・シン・チャーさん。

チャー氏： はい。

書記官： ヒロザネ・チネン、チネンさんは？

ヘイグッド代理人： 沖縄の陪審員の場合には、もし出欠の際に名前を答えなかったら、日本語で名前を繰り返して頂けますか——日本語でもう一度

名前を言ってくれますか？

裁判長： 日本語で言っても英語で言っても同じでしょう。

ヘイグッド代理人： 多分、発音が違います。

裁判長： 確かに。それではそうしましょう。通訳のかた、チネンさんの名前
を読んでくれますか？

通訳官： ヒロザネ・チネンさん。(間をおいて) 欠席です。

書記官： ジャック・A・クラークさん。

クラーク氏： はい。

書記官： コンセプション・コンスタンス・クアレスマさん。

クアレスマ氏： はい。

書記官： ヒダ・H・ドイさん。

ドイ氏： はい。

書記官： フランク・A・エッカーさん。

エッカー氏： はい。

書記官： アーサー・P・エヴァンスさん。

エヴァンス氏： はい。

書記官： セオドア・K・ゴトウさん。

ゴトウ氏： はい。

書記官： ノーマン・ヴェネス・ハーレイさん。

ハーレイ氏： はい。

書記官： L・ヘマンダスさん。

ヘマンダス氏： はい。

書記官： ダン・C・ヒルさん。

ヒル氏： はい。

書記官： オスカー・M・ハギンスさん。

ハギンス氏： はい。

書記官： サダオ・イケハラさん。

イケハラ氏： はい。

書記官： コウスケ・イモリさん。

イモリ氏： はい。

書記官： ゼンイチ・イケハラさん。

イケハラ氏： はい。

書記官： ジェームス・O・アーバインさん。

アーバイン氏： おります。

書記官： トオル・イチカワさん。

通訳官： トオル・イチカワさん。（間をおいて）欠席です。

書記官： シャネル・カビラさん。

通訳官： シャネル・カビラさん。（間をおいて）欠席です。

書記官： チンセイ・キンジョウさん。

キンジョウ氏： はい。

書記官： ユージーン・ノウルズさん。

ノウルズ氏： はい。

書記官： ユウイチ・マツダさん。

マツダ氏： はい。

書記官： トミコ・マツオカさん。

マツオカ氏： 居ります。

書記官： サイモン・R・メレシオさん。

メレシオ氏： はい。

書記官： ケネス・G・ミリントンさん。

ミリントン氏： はい。

書記官： ナナ・マーフィさん。

マーフィ氏： はい。

書記官： トシコ・ミラーさん。

ミラー氏： はい。

書記官： アズマ・ナカヤマさん。

裁判長： その方、もう一度、繰り返してくれますか？

通訳官： アズマ・ナカヤマさん。返事がない。欠席です。

書記官： シンショウ・ニシシマモトさん。

ニシシマモト氏： はい。

書記官： リンジ・ヌクシナさん。

通訳官： リンジ・ヌクシナさん。欠席です。

書記官： ロバート・B・オブライエンさん。

オブライエン氏： はい。

書記官： オーパル・W・パインさん。

パイン氏： はい。

書記官： マデレイン・プラウトさん。

ブラウト氏： はい。
書記官： ロバート・E・パイレスさん。
パイレス氏： はい。
書記官： ヘンリ・C・レイシコットさん。
レイシコット氏： はい。
書記官： ジョン・ロウ・ランスさん。
ランス氏： はい。
書記官： キャサリン・M・ロワンさん。
ロワン氏： はい。
書記官： タケゾウ・サカイさん。
通訳官： タケゾウ・サカイさん。欠席です。
書記官： マリリン・L・スカーブラさん。
スカーブラ氏： はい。
書記官： セオドア・C・シーバイさん。
シーバイ氏： はい。
書記官： エイキ・セネハさん。
セネハ氏： はい。
書記官： クミ・シマブクロさん。
シマブクロ氏： はい。
書記官： ジュンイチ・シマムラさん。
シマムラ氏： はい。
書記官： コウゾウ・シモジさん。
シモジ氏： はい。
書記官： ヨシヒコ・テルヤさん。
テルヤ氏： はい。
書記官： マツジ・ウエチさん。
ウエチ氏： はい。
書記官： ヨシモリ・ウエハラさん。
ウエハラ氏： はい。
書記官： シンユウ・ウクさん。
通訳官： シンユウ・ウクさん。返事無し。
裁判長： ウクさんは欠席。
書記官： スタンレイ・ドウ・ワールさん。

ドゥ・ワール氏： はい。

書記官： ショウコウ・ヤマザトさん。

ヤマザト氏： はい。

書記官： ウィリアム・F・ホァーロンさん。

ホァーロン氏： はい。

書記官： トモマサ・ヨシダさん。

通訳官： トモマサ・ヨシダさん。欠席。

裁判長： ヨシダさんは欠席。

書記官： ラルフ・W・ヤングさん。

ヤング氏： はい。

書記官： 出欠はこれで終わりです。

裁判長： 代理人の方はこちらに来てくれますか？

（裁判長と両代理人の間で行われる、記録されないサイドバー協議があった。）

裁判長： 13人の名前を呼ぶ方に移りましょう。

書記官： アーサー・P・エヴァンスさん。

ヘイグッド代理人： サイドバー協議をお願いできませんか？

（裁判長と両代理人の間で行われる、記録されないサイドバー協議があった。）

書記官： ヨシモリ・ウエハラさん、ヘマンダスさん、ドゥ・ワールさん、ダン・ヒルさん、ジョージ・アンダーソンさん、コウゾウ・シモジさん、ヤマザトさん、ウエチさん、エッカーさん、フランク・エッカーさん、マツオカさん、ゴトウさん。（陪審員たちは、1～12番の陪審席に着席した。）

書記官： 第13番目の陪審員を呼んだほうがいいですか？

裁判長： そうですね。そうして下さい。

マクレラン代理人： すみません。主陪審を選ぶまでは、補充陪審員を呼びたくありません。

裁判長： では、そうしましょう。

マクレラン代理人： 忌避に相違がありますので、補充陪審員は後で選んだ方がずっと良いと思います。

裁判長： 結構です。

さて、先に進む前に、皆さん、本件のような民事事件においては、法律は、原告及び被告それぞれに、3回の専断的忌避を認めていることについて説明します。本件では、被告が2人いますので、原告及び被告双方に、更に1人の専断的忌避を認めると共に、代理人が望むなら、補充裁判員に対しても双方に専断的忌避を認めようと思います。

今重要なことは、裁判所に認められる専断的忌避の回数ではなく、むしろ、専断的忌避とは何かと言うことにあります。

専断的忌避は、予定される陪審員に対して理由を与えることなく行う異議申し立てです。別言すれば、どちらの側も、如何なる理由を述べることもなく、専断的忌避に基づいて、予定される陪審員の免除を裁判所に求める、又はそのようにすることを正当化する権利を有しているということです。後ほど、裁判所は皆さんがた一人一人に質問をし、そして代理人もまた、偏見その他の理由によって、あなた方を忌避する根拠があるか否かを決定するために質問するでしょう。

しかしながら専断的忌避は、代理人が何の理由も与える必要がない点で、ちょっと異なります。一般的には、彼の頭には理由がありますが、陪審を免除してもらうために、自分の理由を述べなければならないということはありません。

私が専断的忌避についてここで説明する理由は、これから、仮にあなた方のどなたかに専断的忌避が行使されたとしても、あなたは、それがあなた、又は、陪審員としてのあなたの奉仕の質に関する何らかの反映であると考えなくて良いからです。

専断的忌避の手続きで、以前免除するのが賢明だと思われた男性又は女性を、代理人が時々陪審員席に呼び戻したいと望むことは、専断的忌避において良く知られた事実です。

ですから、たとえ、あなたが専断的忌避によって忌避されたとしても、そのことに神経質にならないで下さい。

陪審員を選任する手続きはアメリカ司法システムの一部であり、双方に対して公正です。あなたは、出席して呼ばれたときに奉仕できるように準備することによって、あなたの義務を十分に果さなければなりません。

それでは第1番目の陪審員について。

裁判所による質問

Q： エヴァンスさん。あなたの住所氏名と職業を述べてくれませんか。

A： アーサー・P・エヴァンス、沖縄キャンプ・クエ、アメリカ陸軍技術区、供給部チーフ。

Q： あなたは、陪審召喚状受領の直近3ヶ月以上沖縄に住んでいましたか？

A： はい、裁判長。

Q： あなたは今までに、刑事事件で有罪になったことがありますか？

A： ありません、裁判長。

Q： あなたは、有効な陪審奉仕ができなくなるような、何か精神的又は肉体的な病気を持っていますか？

A： 持っておりません、裁判長。

Q： あなたは、陪審奉仕から法的に免除される申し立てをしますか？

A： 致しません、裁判長。

Q： あなたは、本件について何か知識を持っていますか？

A： はい、裁判長。

Q： 説明してくれますか？

A： はい、事故は明け方の3時頃に起こりました。その時、彼は勤務時間中で、建設会社のこの運転手は、眠ってしまい道を外れて、アワセの近くでキルビイ・ロバーズを殺しました。

Q： 何か他に知識は？

A： ありません、裁判長。

Q： あなたは、本件について何か関心がありますか？

A： いいえ、裁判長。

Q： あなたは、原告又は被告若しくは本件に関わる何れかの代理人を知っていますか、又は、関係がありますか？

A： いいえ、裁判長。

Q： あなたは、あなたの判断に影響するような、何らかの先入観又は何らかの感触を持っていますか？

A： ないと思います。

Q： あなたは、公平な評決に達することができない理由を何か知っていますか？

A： いいえ、裁判長。

Q： あなたは本件の争点について、何か意見を形成しましたか？

A： はい、裁判長。

Q： それで、それは何か聞かせてもらえますか？

マクレラン代理人： 裁判長、私たちはエヴァンスさんを理由ありで忌避したいのですが。

ヘイグッド代理人： 私は忌避に賛成します。

裁判長： 結構です。代理人はあなたを忌避しました。したがってエヴァンスさん、裁判所は、忌避に基づいて、陪審員からあなたを免除しようと思えます。あなたは免除されました。来て頂いてありがとうございます。(エヴァンスさんが、陪審員席から退席した。)

裁判長： 書記官さん、他の名前を選んで下さい。

書記官： ノーマン・ハーレイさん。

(手続きの筆記録におけるこの時点から、みんなの同意を得て、陪審候補者の予備審問は、逐語的ではなく、要約されるようになった。)

——ノーマン・ハーレイさんは、裁判長及び両代理人による質問の後、問題のない陪審員1としてパスした。

——ヨシモリ・ウエハラさんは、裁判長による、ほとんど通訳を介した質問の後、免除されて陪審員席から退席した。裁判長と両代理人との間で、報告されない協議が、裁判長がウエハラさんを免除すると決定する前に補足的に行われた。

書記官： (陪審員2のために新たな名前を引く。) コウスケ・イモリさん。

——本件原告側に対する思い入れを証明されたコウスケ・イモリさんは、被告代理人から忌避され、原告代理人が忌避に同意し、免除されて陪審員席から退席した。

書記官： (正常な陪審員2のために新たな名前を引く。) ジュンイチ・シマムラさん。

——ジュンイチ・シマムラさんは、裁判長及び両代理人による質問の後、問題のない陪審員2としてパスした。

——L・ヘマダスさんは、裁判長及び原告代理人による質問の後、忌避され、被告代理人の同意を得て免除された。彼は、陪審員席から退席した。

書記官： (正常な陪審員3のために新たな名前を引く。) チンセイ・キンジョ

ウさん。

- チンセイ・キンジョウさんは、裁判長の質問の後、原告・被告の両代理人
が質問の権利を放棄したため、問題のない陪審員3として認められた。
- スタンレイ・ドゥ・ワールさんは、裁判長及び原告・被告の両代理人の質
問の後、問題のない陪審員4としてパスした。
- ダン・C・ヒルさんは、裁判長及び被告代理人の質問の後、原告代理人が
質問の権利を放棄したため、問題のない陪審員5としてパスした。
- ジョージ・W・アンダーソンさんは、裁判長及び原告代理人の質問の後、
被告代理人が何も質問しなかったため、問題のない陪審員6としてパスし
た。
- コウゾウ・シモジさんは、裁判長による質問、原告代理人による質問の権
利放棄、及び被告代理人による質問の後、裁判所によく知られた琉球政府
の法廷と彼の関係から、被告代理人によって忌避された。原告代理人が忌
避に同意したため、シモジさんは免除され、陪審員席から退席した。

書記官：（正常な陪審員7のために新たな名前を引く。）セオドア・シービー
さん。

マクレラン代理人： 裁判長、この参考人、陪審員について手続きを開始する
前に、10分程度の休憩をとってはでしょうか。

裁判長： 結構です、10分間休憩としましょう。どうか、間に合うように戻っ
てきて下さい。皆さん、あの時計の11時15分迄です。さて、陪審員に選任
された皆さんについては、裁判所は、あなた方そして皆さん一人一人に、
事件が最終的に決着するまで、あなた方の間又は誰か他の人と本件裁判に
関係したテーマについて話したり、如何なる意見も形成したりしてはなら
ないという義務があることを忠告します。どうか説明してくれませんか？
（通訳官が裁判長のコメントを日本語で繰り返した。）

裁判長： 結構です。10分間の休憩としましょう。

（裁判所は、1965年10月25日月曜日午前11時07分に休憩に入り、同じ人が、同
じ日の11時17分に再招集された。）

裁判長： さて、シービーさんの質問を始めましょう。

- 裁判長の質問の後、両代理人が質問の権利を放棄したため、セオドア・

シーバイさんが、7番目の陪審員としてパスした。

書記官：（第8番目の陪審員のための名前を引いて）ショウコウ・ヤマザトさん。

——裁判長の質問の後、両代理人が質問の権利を放棄したため、ショウコウ・ヤマザトさんが、8番目の陪審員として認められた。

書記官：（第9番目の陪審員のための名前を引いて）マツジ・ウエチさん。

——マツジ・ウエチさんは、裁判長の質問で、被告代理人と彼自身が何らかの関係があると言ったため、代理人の忌避の同意を得て忌避された。ウエチさんは陪審員席から退場した。

書記官： テツ・アラサキさん。

——裁判長の質問の後、アラサキさんと彼の雇用者との関係を考慮して代理人が異議を申し立てた。アラサキさんは免除され、陪審員席から退場した。

書記官：（陪審員9番のために新たな名前を引く。）ロバート・パイレスさん。

——裁判長の質問の後、原告・被告の両代理人が質問の権利を放棄したため、ロバート・パイレスさんは陪審員9番としてパスした。

書記官：（陪審員10番のために新たな名前を引く。）フランク・エッカーさん。

——裁判長の質問の後、原告・被告の両代理人が質問の権利を放棄したため、フランク・エッカーさんは陪審員10番としてパスした。

書記官：（陪審員11番のために新たな名前を引く。）トミコ・マツオカさん。

——裁判長の質問の後、原告・被告の両代理人が質問の権利を放棄したため、トミコ・マツオカさんは陪審員11番としてパスした。

書記官：（陪審員12番のために新たな名前を引く。）セオドア・K・ゴトウさん。

——裁判長の質問の後、原告・被告の両代理人が質問の権利を放棄したため、セオドア・K・ゴトウさんは陪審員12番として着席した。

ヘイグッド代理人： お席の方に行って良いでしょうか？（記録されていない補足的な会議がなされた。）

裁判長： ここで、休廷とし、1時15分に再開します。

時間通り1時15分に再開しますので、時間を無駄にしないように、皆さん1時10分には席について下さい。

さて、陪審席の皆さん、裁判所は、皆さんそして皆さんの一人一人に、本件が最終的にあなた方に提起されるまでは、本件裁判に関係する如何なる課題についてもお互いに会話したり、如何なる意見も形成したりしない義務があるということをご注意します。午後1時15分に集まりましょう。

（法廷は1965年10月25日月曜午前11時45分に休憩に入り、午後1時15分に、出席した同じ人たちが再び招集された。）

裁判長： 代理人は進めて下さい。

マクレラン代理人： お席の方に行っても良いでしょうか？

裁判長： もちろんです。

（記録されていない補足的な会議がなされた。）

ヘイグッド代理人： はい。原告は、最初の専断的忌避を断念します。

マクレラン代理人： はい。被告はアンダーソンさんを免除します。

裁判長： アンダーソンさん、あなたは免除されました。

書記官：（名前を調べて）最後の二人の名前は今日来られなかった方の名前です。もう一度引きましょう。

裁判長： よろしいでしょう。

書記官：（新たな6番の陪審員のために引いて）ミス・コンセプション・コンスタンス・クアレスマさん。

——裁判長による、及び引き続き両代理人による質問の後、クアレスマさんは6番目の陪審員として認められた。

裁判長： それでは専断的忌避を続けましょう。

ヘイグッド代理人： ハーレイさんを免除しても結構です。

裁判長： ハーレイさんが免除されました。

——1 番目の陪審として着席していたハーレイさんが退場した。

書記官：（1 番の陪審員のために、代りを引いて）ミス・キャサリン・M・ロワンさん。

——裁判所及び被告代理人による質問に続き、候補者が購買部に勤務していたことを理由に、被告代理人による異議がなされ、原告代理人が同意した。ロワンさんは陪審席を離れた。

書記官：（1 番の陪審員の代りを引いて）ミス・ジェームス・O・アーバインさん。

——裁判長及び両側の代理人による質問の後、アーバインさんは、1 番の陪審員としてパスした。

裁判長： さて、代理人の第2 番目の専断的忌避を始めましょう。

マクレラン代理人： はい。私たちは、キンジョウさんを忌避します。

（第3 番の陪審員であったキンジョウさんが陪審席を後にした）

書記官： シンショウ・ニシシマモトさん。

——裁判長及び原告代理人による質問に続いて、陪審員候補者の英語能力に関連して原告側から理由付き忌避がだされ、被告代理人の同意を得て、ニシシマモトさんは陪審席から退席した。

書記官：（質問する名前をひいて）欠席です。（第3 番目の陪審員のために質問する他の名前）エイキ・セネハさん。

裁判長： スベルは正しいですか、セネハさん？

陪審員見込み者： いいえ、セナハです。

——裁判長と原告代理人による質問の後、被告側代理人から質問がなかったの
で、セナハ氏は第3 番目の陪審員となった。

裁判長： それでは次の専断的忌避を行いましょう。

ヘイグッド代理人： 原告は第3 番目の専断的忌避は行使いたしません。

マクレラン代理人： はい、私たちは陪審番号2 のシマムラさんを免除します。

（シマムラさんは、陪審席を後にした。）

書記官： ケネス・G・ミリントンさん。

——裁判長による質問の後には、両代理人とも質問しなかったので、ミリントンさんは2番の陪審員としてパスした。

裁判長： 原告の第4番目の忌避は専断的忌避ですか？

ヘイグッド代理人： 原告はその第4番目の専断的忌避を撤回します。

マクレラン代理人： はい、私たちはアーバインさんを免除します。

（1番の陪審員として着席していたアーバインさんが退席した。）

書記官： マリリン・L・スカープラさん。

——裁判長と原告代理人による質問の後、被告代理人による質問がなかったため、スカープラさんは1番目の陪審員としてパスした。

裁判長： 私は、これが原告による最後の専断的忌避だと思いますか？

ヘイグッド代理人： それは既に撤回されています、裁判長。私たちは、私たちの4回の専断的忌避をすべて使い切っています。裁判長は、私たちが補充陪審員を指名しようとする場合、他の忌避を許す事に同意されたので、それは補充陪審員に当てられると思います。そうですね？

裁判長： そうです。それでは、陪審員については今終わったものとし、補充陪審員を選任して頂けますか？ それで私は、もしそれを望むのであれば、補充陪審員に対する追加の専断的忌避を代理人に許しましょう。もう一人名前を選んでくれますか？

書記官： ユウイチ・マツダさん。

通訳官： ユウイチ・マツダさん。欠席。

書記官： 今朝、彼はここにいました。（更に引いて）ユージーン・ノウルズさん。

——裁判長の質問の後、両代理人が質問をしなかったため、ノウルズさんは補充陪審員としてパスした。

裁判長： 何か専断的忌避はありますか？

ヘイグッド代理人： 原告は専断的忌避を差し控えます。

マクレラン代理人： 私たちも忌避しません。

裁判長： 大変結構。陪審員は今全員そろいました。さて、陪審員の皆さん、起立して右手を挙げて宣誓して下さい。

（陪審員は正式に宣誓した。）

裁判長： 通訳の方は宣誓を繰り返してくれますか？

(通訳は日本語で宣誓を繰り返した。)

裁判長： 陪審員の皆さん。もし必要ならメモを取っても結構です。もしメモを取る場合には、裁判所から提供された紙に記録し、各セッションの終わりに、次のセッションまで安全に保管するために、裁判所書記官が提供する布袋の中に入れられます。

さあこれで、近い将来、本件を審理する準備が整いました。代理人には冒頭陳述の機会が与えられるでしょう。それから原告は、証人及び証拠を含む彼女の訴訟を法廷に提出し、次いで被告が、証人及び証拠を含む彼らの事件を法廷に提出するでしょう。

その後、双方代理人によって最終弁論がなされるでしょう。次に裁判所が陪審員に法律について説示し、あなた方は、陪審長を選びあなた方の決定を出すために、法廷を出ます。

陪審長はあなた方の評議の議長となり、各陪審員に、その見解を表明するための公正な機会を与えます。

陪審員は、アメリカの正義のシステムにおいて極めて重要な役割を果たします。私たちの権利と自由の保護が、私たちの偉大な遺産である自由という原則を訴訟手続きに置き、普通の努力で、共に働く裁判長と陪審員のチームワークを通して達成されます。裁判長が事件に適用されるべき法律を決める一方、陪審員は事実を決定するのです。

このように、陪審員は裁判そのものの重要な一部となるのです。有能な陪審員は、正しい判断、真正直、そして完璧な公正感覚を有する男性及び女性によって構成されます。

陪審員は、同胞間の法と秩序を維持し、正義を遂行します。彼らの一番の報酬は、誠実に、立派に、そして十分に任務を果たしたという認識です。

裁判中は、どちらかの側から呼ばれた証人は、他の側の代理人から反対質問を受けます。

裁判の間中、裁判長は、陪審員が在席している中で、法律問題を決定することが求められます。

通常これらの問題は、一方の側が提出を望む宣誓証言に対する異議申し立てに関するものです。

法律は、裁判長がこのような問題を決定することを要求しています。裁

判長による決定は、彼がどちらか一方を支持することを意味するものではありません。要するに、彼は単に、法は許すあるいは許容しない、その質問をすることは許される、と言うだけです。

裁判長が、すべての異議を原告あるいは被告に対して好意的に決定することは可能です。そのことは、事案が陪審員によって、原告のためあるいは被告のために決定されるべきである、と言うことを意味するものではありません。

仮に裁判長が、すべての異議に対して一方の側に好意的に決定した場合であっても、陪審員は適切に、事案を反対側に好意的に決定しても良いのです。

陪審員は、事案を「法律及び証拠に基づいて」決定することを宣誓しています。その法律は、裁判長が宣言したものです。あなたたちは、それについて後で説示されるでしょう。

証拠は、法廷にて行われた証言と法廷で採用された証拠です。陪審員が考えるのにどの証拠が適切かというのは、証拠の法則に基づいています。

双方に対する証拠調べが終わった後で、代理人等が、彼らの反論の中で証拠について議論します。これは、陪審員の記憶から抜けていたかも知れない証言を、陪審員が思い出すのに役立ちます。

反論の主な目的は、証拠を論理的な順に並べることにあります。法律家は、証言の異なった部分を組み合わせて事実につなげます。

民事事件における陪審は、何が本当の事実なのかを決定しなければならず、裁判長は、法とは何かを陪審員に話します。その基本に立って、陪審員は、単に、原告又は被告が勝るかどうかを決定しなければなりません。

陪審員は、自分の奉仕に影響するいかなる事項についても裁判長に知らせる必要があります。また、どのような突発事態であっても法廷に知らせる必要があります。個人的な突発事態の場合には、陪審員は裁判所事務官の誰かを介して裁判長に伝言をしたり、裁判長と個人的に会う事を求めたりすることもできます。

陪審員は、廊下や玄関でぐずぐずしてはなりません。それぞれの陪審員は、宣誓証言に細心の注意を払わなければなりません。

陪審員は、自分の偏見を捨てて法廷の指示に従うことを誓っています。陪審員は、自分自身の最善の判断に従って評決しなければなりません。陪審員は偏見のない心を持ち続けなければなりません。陪審員たちは、証言

が終わる前に事案について議論してはならず、事案は裁判長に提出されるのです。

経験から言えば、一度自分の意見を表明した人はそれを変えることに躊躇します。したがって陪審員にとって、すべてのストーリーが語られるまで、自分の意見を言わないことが賢いのです。

裁判の間中、陪審員は証拠法則への説明を聞くかも知れません。この法則の幾つかは、法律家でない人には奇妙に見えるかも知れません。

しかしながら、一つ一つの法則には目的があります。その法則は何百年にもわたる、訴訟の審理における経験の結果なのです。

事件を起した単なる事実は証拠ではありません。代理人たちによる冒頭陳述及び最終弁論は証拠ではありません。陪審員は、証拠によって立証されていない反論における、代理人の如何なる陳述も無視すべきです。

陪審員はまた、もし裁判長の説示と合致していない場合には、この事件に関して適用される法に関して代理人がした、如何なる陳述も無視して良いのです。

陪審員には、彼らに有する経験、常識及び通常の知識のすべてを使用することが期待されています。しかしながら、陪審員たちはどのような私的情報源をも信頼してはなりません。

このように、陪審員は裁判の間中注意深くなくてはならず、家庭その他の場所で事案について議論してはなりません。陪審員が私的情報源から得た事実は、半分だけ真実かも知れません。それは説明できる事実かも知れないし、恐らく証拠の法則は、それが結果に影響すべきでないことを要求します。

何れにしても、事案に関するどのような事実についても、当事者が知り、説明しあるいは答える機会を有する事こそが、唯一公正であるのです。

裁判の間に、陪審員がどこかで事案に関する何らかの事実を知ったことが明らかになったときは、陪審員は裁判所に知らせるべきです。陪審員はそのような事実のいかなるものも陪審員室で話すべきではありません。

陪審員たちは、陪審員としてではなく、他の人たちと事案について話してはならず、新聞にあるその事案を読んではなりません。また、事案について言及するかもしれないラジオやテレビ放送を避けるべきです。陪審員の評決は、法廷に出された証拠以外の何ものにも基づいてはならないのです。

それらの規則を壊すと、陪審員を混乱させるでしょう。心の中で、裁判での証言と他の情報源から来た報告を分けることは困難であり、このような外部報告は、先入観あるいは不正確さをもたらします。

もし外部の人間があなたと話そうと試み、陪審席にいる陪審員と事案について話そうと試みてきた場合には、陪審員は次のようにする必要があります。

第1に、陪審員は出来事を直ちに裁判長に報告する。

第2に、陪審員は、その事案について議論したり、どのような情報であれ、裁判所以外から情報を得たりすることは、陪審員にとって不適切なことである、とその人物に告げるべきです。

事案に関係する陪審員は、いかなる課題についても、いかなる代理人、証人あるいは当事者と、事案について話すことを控えるべきです。このような接触は、新たな審理を必要とするかも知れません。

陪審サービスの遂行は、市民の社会的責任の実現です。誠実な奉仕は、それ自身が、大切な仕事をうまくやり通した満足という報酬をもたらします。私たち政府の司法省の支援のもとで、一般市民が参加できる陪審義務の十分で正直な遂行以上に、もっと価値のある仕事はありません。

民主主義体制の実効性自体が、私たちの法廷で奉仕する陪審員の、誠実、知性及び一般的な素養によって、主として評価されます。

ここまでで、何か理解できない方はおられますか？ 結構です。さあ、通訳に翻訳させましょう。

（通訳が、日本語で説示を繰り返した。）

裁判長：　ここまでで、陪審員の皆さんが理解できなかったことがあるか、聞いてくれますか？

通訳：　（日本語で質問を繰り返した後）何も答えはありません。

裁判長：　結構です。裁判所はこれから、あなた方に、決定すべき争点があるかを知ってもらえるように、本件の訴状と答弁書を読みあげます。さらに、注目すべき点についていくつか述べてみます。

本件訴訟はツルコ・N・ロバーズさんから起されました。彼女はまた、未成年のドナルド・ロバーズさんの代理人でもあります。法律上は、未成年者は自分名義で訴訟を提起できないので、後見人の名義で訴訟手続きをすることが要求されます。

したがって、ツルコ・N・ロバーズさんが、自分自身を代理すると共に、彼女の子供ドナルド・ロバーズさんに代わって訴訟を提起しました。訴状

には二つの請求原因があり、請求原因の一つは申し立ての一つと類似していますので、あなた方は、本件には二つの申し立てがあるというかも知れませんが、実際、訴状では、それらは「counts (訴因)」と呼ばれています。

もともと、訴状はツルコ・N・ロバーズ及びドナルド・ロバーズ表示になっていますが、法的理由から、表示は、ツルコ・N・ロバーズ及び未成年者ドナルド・ロバーズの法定代理人ツルコ・N・ロバーズ、と補正されました。

さて、第1の請求原因、あるいは申し立ては、AFIAとして知られているアメリカ外国保険組合と、ニューヨークの企業であるホーム保険会社に対するものであり、彼らは本件の被告です。

さて、第1の請求原因において、原告は、1959年11月30日、及び、それからこの裁判に対する実質的にすべての時間、保険会社としての被告と被保険者としての極東建設サービス社との間に、確実に損害保険契約、即ち、外国自動車保険証券番号780A-2215号が存在しており、それによって被告は、被告が被保険者に代わって、そこに記載された自動車の、所有、維持又は使用から発生する、事故に起因して個人に認められた損害賠償として、法律的に支払う義務を負った被保険者の合計賠償額を支払うという、善良で十分な配慮をすることに同意した、と述べています。

契約期間中における被告の法的責任の限度額は、一回の事故当たり、対人事故あるいは一人の死亡事故に対して10万ドルでした。パラグラフ2における主張は被告によって否認されました。

読み上げられたのは、正にパラグラフ1であり、最初のパラグラフは事案を聴くこの裁判所の裁判管轄の問題なので、あなた方には関係ありません。したがって、私はそれを読みませんでした。しかしながら第2パラグラフは被告に依って否認されています。

さて、パラグラフ3は、1959年11月30日、それぞれ原告の、夫であり父であるオーレン・キルビイ・ロバーズ氏が、1958年型シボレーのピックアップトラック1.5トン、車台番号F-10295B、自動車登録番号、つまり、プレートNo. PC-5049で、被保険者である、極東建設サービス社によって所有されており、前のパラグラフに記載された損害賠償保険契約条件に依って被保険者となっている、その企業の従業員であるチョウヘイ・トミシロ氏が運転していた車に、ぶつけられ殺されたと述べています。

そのパラグラフに関して、被告は1959年11月30日、極東建設サービス社

が所有する1958年型シボレーのピックアップトラックにオーレン・キルビイ・ロバース氏がぶつけられ殺されたことを認めています。被告はまた、オーレン・キルビイ・ロバース氏にぶつかって殺した車の運転手がチョウヘイ・トミシロ氏であり、当時極東建設サービス社の従業員であったことを認めました。

さて、原告はパラグラフ4で述べている——

マクレラン代理人： 済みませんが、あなたは答弁書のパラグラフ3をごらんになりましたか？

裁判長： 自白に対する要求と共にパラグラフ3は、自白に対する要求で、あなたは余分な事をしてくれました。

マクレラン代理人： ウム——

裁判長： さて、パラグラフ4で原告は、1964年7月20日、オーレン・キルビイ・ロバース氏の死に対する6万ドルという額の損害賠償のために、極東建設サービス社に対してこの裁判所の判決を得て、その判決が、1965年3月9日のアメリカ民事部控訴裁判所によって維持され、そして現時点では、それが終局判決だと述べています。現在、被告はパラグラフに含まれた事実関係を認め——しかしながら被告は、判決が最終であるか否かということを否認すること以外は、したがってあなた方は、後でそのことについて説示されるでしょう。

パラグラフ5には、被告が原告に、6万ドル及び損害賠償契約と終局判決に基づく利息合計額の支払い義務を有することが述べられています。

これらの主張は被告によって否認されています。

第2の請求原因は、被告と、チョウヘイ・トミシロ氏、つまり、オーレン・キルビイ・ロバース氏の死をもたらした、その損害賠償保険契約書に定義された「被保険者」の用語に含まれ、保険の対象となっていた車両の運転手、に対して取り戻された判決の双方に基づくものです。そして、それらの主張は被告によって否認されています。

次に、パラグラフ3は、1964年7月23日、オーレン・キルビイ・ロバース氏の死に関して、チョウヘイ・トミシロ氏の損害賠償に対するこの名誉ある法廷の判決を原告が取り戻したこと、そして、この判決が上訴されず、従って終局判決であると主張しています。

被告はこの判決が取り戻されたという事実を認める一方、その判決が終局判決であることは否認しています。そこで再び、判決が最終のものであ

るかどうかはあなた方が関与することではなく、本法廷がそれについては説示します。

最後のパラグラフは、あなた方に、車両の運転手であったチョウヘイ・トミシロ氏に対する判断に基づいて、5千ドル、その利息及び経費に関し、被告に対する判断を求めています。

さて、私はこのことを再び簡単に復習しようと思います、と言うのも、あなた方は、そのすべてを維持しないこともあり得るからです。もし私があなたの立場であったら、私自身が維持するかどうか疑問です。

さあ、彼女自身及び未成年の彼女の息子、ドナルド・ロバーズさんを代理して、別名AFIAとして知られるアメリカ外国保険協会及びニューヨークの企業であるホーム保険会社を相手に訴訟を提起した、ツルコ・N・ロバーズさんのこの訴状について、再度考えましょう。

2つの請求原因又は申し立てがあります。各請求原因は両被告に対するものです。第1の請求原因は、私がお話したように、極東建設サービス社に対して取り戻された判決に基づくものであり、第2の請求原因は、車両の運転手、チョウヘイ・トミシロ氏に宣告された5千ドルの判決に基づくものです。さあ、簡単に引き返してみましょう。

再度、訴状において、原告の第1の請求原因は、1959年11月30日、及びそれから本件訴訟のすべての時間存在し、現在も、保険業者としての被告と被保険者名義の極東建設サービス社との間に存在する、確かな損害賠償保険契約、即ち、外国の自動車保険証券番号780A-2215が存在しており、それによって被告は、被告が被保険者に代わって、そこに記載された事故から発生する、事故に起因して何人にも認められ、いつでもそこから起因する、肉体的損傷、死を含む病気や疾病等の損害賠償として、1965年10月25日の命令に従って法律的に支払う義務を負った被保険者の合計賠償額を支払うという、善良で十分な配慮をすることに同意した、と述べています。

どのような1つの事故における、どのような1人の人の肉体的な損傷又は死に対しても、契約の条件における被告の負担限度額は10万ドルでした。それらの申し立てはすべて被告に依って否認され、別の言葉でいうと、被告は、このような保険証券の存在、及び、そのパラグラフのその余の申し立てを否認しています。

さて、相変わらず第1の請求原因です。第2——あるいは第3パラグラフ、次のパラグラフでは、1959年11月30日、原告のそれぞれ夫であり父で

あるオーレン・キルビイ・ロバーズ氏が、1958年型シボレーのピックアップトラック1.5トン、車台番号F-10295B、自動車登録番号、つまりプレートNo. PC-5049で、被保険者である、極東建設サービス社によって所有されており、その企業の従業員であるチョウヘイ・トミシロ氏が運転していた車にぶつけられ殺されたこと、そして、トミシロ氏が、前のパラグラフに記載された損害賠償保険契約の条件に依って、被保険者となっていたと主張されています。

さて、そのパラグラフについて、被告は、1959年11月30日、オーレン・キルビイ・ロバーズ氏が、極東建設サービス社によって所有されていた1958年型シボレーのピックアップトラックにぶつけられ殺されたこと、オーレン・キルビイ・ロバーズ氏にぶつかって殺した車の運転手がチョウヘイ・トミシロ氏であったこと、及び、その時彼が極東建設サービス社の従業員であったことを認めています。

被告は、パラグラフ3のその他の主張については否認しています。そして、あなた方への情報ですが、否認されているのは、結局原告によれば、前のパラグラフに記載された損害賠償保険契約条件のもとに、このシボレーが保険の対象になっていたという事実です。被告はこの法的責任を否認しています。

次に、1965年3月9日のアメリカ民事部控訴裁判所によって支持された、オーレン・キルビイ・ロバーズ氏の死に対して6万ドルという額の損害のために、極東建設サービス社に対するこの法廷の判決を原告が取り戻し、その判決が終局判決であるという申し立てを、私たちは1964年7月20日に受け取りました。

被告は、そこに記載された判決が終局判決であることを否認する以外、それらの申し立てについては認めています。私が前に言いましたように、あなた方は、その判決が終局判決であるかどうかには関係せず、それを決定する必要はありません。したがって、第1の請求原因は、損害賠償保険契約及び終局判決に基づく、6万ドルとそれに対する利息の合計額を原告が被告に請求しているということです。現在、このすべては、被告によって否認されています。

さて、私があなた方に読んで聞かせたパラグラフは、第2の請求原因でも同じものが繰り返されています。即ち、被告に対する請求原因は、チョウヘイ・トミシロ氏に対して合計5千ドルという取り戻された判決に基づ

いています。

さあ、第2の請求原因における次のパラグラフでは、オーレン・キルビイ・ロバーズ氏の死亡原因となった損害賠償保険対象車の運転手であったチョウヘイ・トミシロ氏が、損害賠償保険契約書に定義された「被保険者」の条件に含まれていたと主張されています。それは代理人によって否認されています。したがって、判決の詳細が与えられます。

1964年7月20日に、原告は、オーレン・キルビイ・ロバーズ氏の死に対する損害のための、チョウヘイ・トミシロ氏に対する本法廷の判決を取り戻したところ、その判決に対しては控訴されず、従ってそれは終局判決です。現在被告は、原告がこのような判決を得たという事実を認めるものの、それが終局判決であることを否認しており、そして私は、判決が終局判決であったか否かは皆さんには関係ないことであると述べました。

そこで最後のパラグラフでは、損害賠償保険契約に基づくと共にその終局判決に基づいて、被告は原告に対し、利息込みで5千ドルの支払い義務を負っていると主張されています。しかし、その主張は被告によって否認されています。

どなたか、私が今まで言ったことを理解できなかった方はいますか？通訳の方は、そのことを日本語で繰り返してくれますか？
(通訳が、その質問を日本語で繰り返した。)

裁判長：（間をおいて）結構です。代理人は冒頭陳述をしますか？

ヘイグッド代理人： 裁判長、私は自分の冒頭陳述を明日行いたいのですが、何時から始めればよろしいでしょうか？

裁判長： 大変結構です。皆さん、今日はこれで終わりです。しかしながら、裁判所はもう一度あなた方に、本件訴訟に関する事項を、あなた方の間で、あるいは誰か他の人と意見を交わさないということ、あるいは、事案が最終的にあなた方に提出されるまでは如何なる意見も形成しないこと、更に、事件について新聞を読んだりラジオを聞いたりしないことは、あなた方そしてあなた方一人一人の義務であるということを忠告します。

今ここで、更に何かありますか？

ヘイグッド代理人： 何もないと思います、裁判長。

マクレラン代理人： 何もございません、裁判長。

裁判長： 結構です。それでは、これで閉廷します。明日朝9時30分に再度集

まりましょう。皆さん進行が遅れないように、朝9時25分には法廷に入るように心がけて下さい。

それではこれで閉廷します。

(1965年10月25日月曜日14時30分に閉廷、1965年10月26日、朝9時30分に再招集の予定。)

(1965年10月25日月曜日14時30分に閉廷、続いて1965年10月26日火曜日、午前9時40分に、裁判所書記官を除く同じ人々が再招集された。)

裁判長： ヘイグッドさん、ロバーズさんは、なぜ今朝、遅れているのかわかりますか？

ヘイグッド代理人： 裁判長、彼女はこの裁判所にいますが、新鮮な空気を吸うために外にでています。

裁判長： 彼女は気分が悪いのですか？ 大丈夫でしょうか？

ヘイグッド代理人： 大丈夫です。原告は始める準備ができました。裁判長。

裁判長： 結構です。

ヘイグッド代理人： 始めてよろしいでしょうか？

裁判長： どうぞ。始めて下さって結構です。

ヘイグッド代理人： 原告の冒頭弁論です。

お集まりの皆様、これは、ツルコ・ロバーズさん、彼女自身の事件であり、母親として後見人としての事件でもあります。この裁判において彼女が後見人をしているのは——

裁判長： すみませんが、ヘイグッドさん。もう少し大きな声で話していただけますか？ そうすれば速記官にもあなたの声が聞こえると思います。

ヘイグッド代理人： わかりました。彼女は、この裁判において彼女の横に座っている幼い子ども、ドナルド・ロバーズさんの後見人です。昨日、裁判長が皆さんに説明したように、本件は、以前行われたオーレン・カービィ・ロバーズさんの死に関する裁判が極東建設サービス社とチョウヘイ・トミシロ氏に払うように命じた金額について、被告保険会社がロバーズさんと彼女の息子に支払うように求めるものです。

彼の友人のほとんどは、先の裁判で彼を「カービィ」ロバーズと呼んでいましたので、私も彼を「カービィ」ロバーズさんと呼ぼうと思います。

裁判長が皆さんに説明したように、今この裁判は民事裁判であって、刑

事裁判ではありません。皆さんの多くは、法廷での手続きや慣例について、おそらく限られた経験しかもたないでしょう。皆さんのうちの多くは、今まさに初めて陪審の義務を経験しているところであるといったほうがいいかもしれません。

本裁判の手順に注意深く従うことがあなたにとって非常に重要になります。なぜなら、これから起こるのはドラマチックな裁判でも面白い裁判でもなく、一つの契約に関する訴訟だからです。皆さんも映画や演劇、あるいは、テレビで法廷場面を見たことがあるでしょう。たとえば、テレビシリーズの「The Defenders」を見たことがある方が多いかもしれません。ほかにもペリー・メイスンを見たことがあるかもしれません。これらのテレビ番組で扱っているのはほとんど刑事事件です。なぜなら刑事事件は、その性質上、民事事件よりは、少しドラマチックであり、脚本の題材に向いているからです。しかし、今回の事件は民事事件であって、刑事事件ではありません。

もう一度、私たちがペリー・メイスンやそのほかテレビ番組や映画の登場人物たちに目を向けると、事件に視聴者の注意を向けるために、脚本家が事件に特別の名前をつけることが時折あります。私は本件を「不必要な訴訟事件」と名付けました。それは、この訴訟をする必要がなかったということではありません。不必要であるべきだった、という趣旨です。昨年、私たちは別の裁判を起こしました。それが、この名前を皆さんに提案する理由です。昨年、一つの裁判がありました。ロバーズさんと彼女の息子は、極東建設サービス社とテラウェア社、そして、この会社の沖縄人の従業員であり、機械主任であり、現場監督であったチョウヘイ・トミシロ氏を、カービー・ロバーズ氏の死について訴えたのです。カービー・ロバーズ氏は、1959年10月30日の早朝に死亡させられました。カービー・ロバーズ氏は、アメリカ国籍の39歳でした。彼は、ツルコ・ロバーズさんと死の約3年前に結婚し、ロジャーズ百貨店から、丘の上から150メートルほど北のルート5における緊急発掘作業の監督中に死亡させられたのです。

この裁判の中で、私たちは、彼が、チョウヘイ・トミシロ氏という人物が運転する1958年製のシボレーのピックアップトラックによってひき殺されたこと、そのトラックは極東建設サービス社所有のものであったこと、そして、彼は事実上即死であったことをお示しします。彼の息子であるドナルド・ロバーズさんが生まれたのはこのカービー・ロバーズ氏の死後で

した。

ロバーズ氏が亡くなった時、そのシボレーのピックアップトラックを所有していた極東建設サービス社は、ある保険証券を持っていました。私は、これら保険証券の存在を証明しようと思っています。

この事件にもう一つ別の名を与えるならば、「ミステリアスに失われた保険証券事件」です。裁判所が皆さんに昨日読み上げた申し立ての中に記述されていた、実際の保険証券を見つけようと大変骨を折ってきたにも関わらず、どういうわけかそれは見つけだせませんでした。私はその存在を証明しようと思っています。それが、皆さんに本法廷で提示される証拠に注意を払ってほしい理由です。

この裁判は、すでに出されたある判決ならびに保険の契約内容についての裁判です。私がロバーズさんのために勝ち取った、極東建設サービス社に対して6万ドル、チョウヘイ・トミシロ氏に対して5千ドルを請求する裁判の判決を示すことができます。しかし、この支払いについて被告に責任があることを示すためには、私が存在することを示そうとしている自動車責任保険の証券が実際に存在したことをお示ししなければなりません。

ここでは、ほかの手段、一連の証拠を通して、この保険証券が存在することの証明を試みようと思っています。われわれは、保険証券のパンフレットの形式での書証によってこれを示す予定です。これは極東建設サービス社の記録の一部であり、保険会社から極東建設サービス社、通称FECONに送られたものです。また、保険証券番号や補償範囲の性質に言及する他の書証もあります。

私はまた、この事件の証人の一人としてジョージ・ホール氏を呼びたいと考えています。彼は、カービー・ロバーズ氏が死んだとき、極東建設サービス社の所長兼副社長をしていました。私は、ホール氏の口頭での証言から、この保険証券の存在について彼が知っていること、そして、その内容がどのようなものであったかを聞きだそうと思っています。

原告から損害賠償保険証券の提示がないのには、原告にはどうしようもない事情によるものであるということをご理解ください。落ち着いてその事情の意味するものについて考えてください。極東建設サービス社は、損害賠償保険について保険会社と契約しました。保険会社は、賠償範囲が存在することを証明するために損害賠償保険の証券を手渡しました。しかし、私のクライアントと私自身は、この取引の外側にいるのです。カービー・

ロバーズ氏が40フィートの発掘現場の端に立っていてそこで死亡させられた時、彼が保険証券のコピーを目にする機会はありませんでした。目にしたこともない証券の存在を証明するのは少しばかり難しいことです。私たちは法廷で定められた範囲内で、先の判決の債務者である被告保険会社が被告建設会社のどちらかに、彼の保険証券を提出させようと努力に努力を重ねましたが、巨大な壁にぶち当たり、叶いませんでした。彼らがいうには、それがどこにあるかわからないというものでした。皆さん、私は、この非常に重要な書類がないという事実から、皆さん自身が結論を導き出していきたいと思えます。

さて、本事件には2つの請求原因があります。第1の請求原因は、保険証券、カーピィ・ロバーズ氏の死という事実、そして、6万ドルの終局判決が指名被保険者に対して得られたという事実を申し立てるものです。ここで、「指名被保険者」という言葉は、保証を受けるその人、保険証券の所有者としてその証券に名前がある人を意味するのです。このケースでそれは、極東建設サービス社、すなわちFECONです。なお、ご存じのように、ほとんどの保険は、指名被保険者に加えて、広い適用範囲を許し、指名被保険者の指示または許可を得て自動車を運転する可能性のある人にも適用範囲を拡げています。ここで、本事件の2つ目の請求原因を思い出してもらうために、皆さんにお見せし、証明することが必要になるものがあります。チョウヘイ・トミシロ氏は実際に自動車の運転手であり、5千ドルの判決が下がっています。これが2つ目の請求原因です。チョウエイ氏は、保険証券の被保険者に属する人であり、チョウエイ氏に対する判決は、本件における被告保険会社によって支払われるべきです。

ここで、チョウヘイ・トミシロ氏が、保険証券において被保険者に分類される人物であったということを証明するために、彼が、指定被保険者の許可を得て車を運転していたということを立証する必要があるでしょう。皆さんがこの訴訟で耳にすることになることですが、トミシロ氏が事故を起こした際、彼は運転免許証を持っていなかったという証拠について話したいと思います。トミシロ氏は、予定されている証人の一人です。トミシロ氏がこの車を運転する許可を得ていたか否かについては双方からの証言があるでしょう。私は、彼が許可を得て運転していたと証明しようと考えています。以上が本訴訟であり、私が証明しようと考えていることです。

さて、皆さんは、被告会社が、自分たちの主張を下支えするような考え

を皆さんに与えようとして行った弁論、申し立て、その他の法的駆け引きを十分見てきたと思います。皆さんの中には、昨日の選任手続きで皆さんそれぞれが陪審員として相応しいかどうかを検討されたとき、被告会社の代理人が「損害賠償」と「補償」という言葉の違いについて理解しているか尋ねたことを思い出すかもしれません。皆さん、私は、この保険証券の適用条件の高度に技術的な議論に皆さんが入っていくことが可能であることを、この保険証券の適用条件がどのようなものであるかを示すことによってお示しします。

申し上げた通り、このミステリアスに失われた保険証券は、彼の訴訟の根拠となるものです。この保険証券がどのような適用条件であったのかを私たちは知りません。私は、皆さんの前に証拠を提示し、これがどのような種類の保険証券であったのかを皆さんに判断してもらうつもりです。そして、皆さんは、この保険証券の直接的な検討以外の方法で、どのようなものであったのかを判断しなければなりません。なぜかというと、正直に述べれば、私たちにはそれを作ることができないからです。被告保険会社は、この法廷でその立場を劇的に変えて、このミステリアスに失われた保険証券を作ることが十分可能であるのにも関わらず、それをしないでしよう。しかし、私は、やや突飛な証拠、保険証券以外の証拠によって保険証券の適用条件がどのようなものであったかを皆さんに証明するように努力するつもりです。そして、皆さんの常識を使い、皆さんがみた証拠から正当に推察することのできる範囲内での推察をするようお願いするつもりです。

ここで、皆さんは、訴訟における事実認定者です。法壇にいる裁判長は、法の決定者です。彼は、皆さんに訴訟とはどのようなものであるかをお話しするでしょう。裁判長は、必要な時になりましたら、証拠の法的効果を決定するために、保険証券とすべての書証を解釈するでしょう。これは、裁判長の役目です。彼は、法の専門家です。皆さんは、事実の発見者です。皆さんは証拠に慎重に耳を傾けなければなりません。証拠だけでは足りない部分がありそうですが、それらは埋めることのできない不足ではないと考えています。常識と分別を利用し、日常世界における皆さんの経験をえば、これらの不足を埋めることができるでしょう。

さて、最初にお話しした、刑事事件の訴追手続きと本件のような民事事件における手続きとの違いの話に戻りましょう。本件は民事訴訟です。こ

れからの手続きの中の適切なタイミングで、裁判長は皆さんに、原告が勝訴するために必要な挙証責任についての説示をするでしょう。この民事事件と、皆さんになじみのある刑事手続きとを混同しないようにしてください。なぜなら、裁判長があなたに助言するように、刑事事件では、検察官が合理的な疑いを超えて被疑事実について各条件を満たしていることを証明する責任を負いますが、民事事件では、原告は、刑事事件の場合のような高い挙証責任を負わないからです。

裁判長は、皆さんに、民事事件において、原告は、自分の主張を証明するには証拠の優越、つまり原告の主張のほうが被告の主張よりももっともらしいと考えられる必要があると助言するでしょう。言い換えれば、原告が負う挙証責任は、その主張される出来事が起こらなかったというよりも起こったというほうがそれらしいと皆さんに信じてもらうことです。私たちは、合理的な疑いを超えるような厳しい挙証責任をもちません。皆さんは、この契約、この保険証券が存在しないため、幾分かの合理的な疑いをもつことになるでしょうが、私が皆さんの前に提示する証拠によって、その存在をある程度推定させ、これらの疑いを解消させ、最終的に皆さんを説得できることを望んでいます。そして、カービー・ロバーズ氏が亡くなった際に、極東建設サービス社と被告保険会社の間に、誰であれ人身傷害と死亡時に一人当たり10万ドルを、あるいは、すべての人身傷害と死亡時に一事件当たり30万ドルを上限とする損害賠償保険証券が存在したということ、証拠の優越によって、皆さんに理解していただくことができると期待しています。なお重要ではありませんが物損に関しては、この保険証券において、物損の損害責任の上限は、2万5千ドルであったことを証明します。

私は、極東建設サービス社によって持ち出されたその保険証券は、本件被告会社のひとつであるアメリカ外国保険協会によって発行されたものであり、ニューヨークの企業であるもう一方の被告会社、ホーム保険会社の代理としておこなわれたものであることを証明したいと思っています。カービー・ロバーズ氏を轢いたシボレーのピックアップトラックは、その保険証券の補償範囲内に含まれる乗り物の1つであるということ、証明したいと考えています。また、私は、乗り物の運転手は、この保険証券によって指定被保険者として名前があげられている人物に加えて、保証対象に該当する人物であることも証明できるでしょう。

そして、これらの事実を証明したのちに、裁判長に、特定の事実認定を

皆さんに依頼するようお願いするつもりです。これは、この種の訴訟で認められていることです。特定の事実の認定は、特別な評決の形で行われるでしょう。これは一般的な評決に加えて行われるものであり、裁判長が皆さんに提出することを依頼するものです。つまり、ツルコ・ロバーズさんとドナルド・ロバーズさんに特定の金額の支払いを保険会社に命ずる評決を皆さんをお願いするのに加えて、それぞれの問題に対してそれぞれの答えを示すこと、つまり証明されたこととされなかったことを確定することが求められるでしょう。

保険証券の保障条件について、保険証券の保障条件とはどういうものであるかということ、他の未記入の用紙に基づいてお示しすることは可能です。結局、保険会社は、それぞれの依頼人ごとに保険証券を別々に分けて作成するようなことはせず、会社は、特定の印刷された用紙を用い、それらは彼らの言葉で言うと、多少なりとも標準的なものです。おそらく、この保険証券の言葉遣いがある程度証明するためにこのような様式に依拠することになるとは思いますが、皆さんに証明しようと試みるものの中には、そして、皆さんに特別な評決を提出するように依頼するように私が裁判長をお願いするものの中には、この失われた保険証券が、被告保険会社の損害賠償——

裁判長： すみません。この保険証券が被告保険会社を保証する、と言いましたか？

ヘイグッド代理人： 皆さんに証明しようと試みるものは、そして、皆さんに特別評決を提出するよう依頼するのは、1つめにはこの失われた保険証券が保証するのは、極東建設サービス社の損害に対する責任だけなのか、ということです。皆さんが決定するように依頼される2つめのことは、この保険証券が、事故の発生直後の保険会社への通知を被保険者に要求しているか否かです。3つめは、この保険証券が、証人の出席を保証すること、あらゆる訴訟の弁護を補助すること、証拠を集めること、聴聞や公判に出席することについて被保険者の協力を条件として含んでいるかどうかです。皆さんが決定するように依頼される4つめのことは、この保険証券が、提起された訴訟に関連して、あらゆる苦情申し立て、訴訟その他の申し立ての保険会社への転送を必要としているかです。つまり、「この保険証券が必要としているか」というよりも、この保険証券は、被保険者に対して起こるかもしれないあらゆる訴訟の弁護をコントロールするために保険会社

に権限を与えていたのか？ これらが、事実の特別認定の方法で、この事件で皆さんの認定が求められることになるということです。

この手続きのなかで、皆さんが証言を聞いている間、もし皆さんが以上のことを心に留めておいていただければ、この裁判の終わりに皆さんが決定する際に役に立つでしょう。なお、裁判長は、この裁判の間、ノートを取ることを許可するでしょう。皆さんの多くは、メモ帳と鉛筆をもっていらっしゃるようです。それは本件のような事件ではよいことです。皆さんが、記録しておきたいと望む証拠を聞いたときに常にノートを取ることは、ある事実を正当に認定することが後でできるかどうかの決め手になると思います。

なお、この裁判の中で、ペリー・メイソンのような何かのドラマチックなことが起こると約束できませんが、私たちは、おおむね次の手続きに進む準備ができたようです。私は、最初の証人として、ツルコ・ロバーズさんと呼び、彼女に証言台に立って頂きたいと思います。私は、彼女にいくつかの質問をする予定です。

裁判長： 代理人、通訳は必要ですか？

ヘイグッド代理人： いいえ、裁判長。

裁判長：（書記官に）必要ないですね？ 証人、宣誓して下さいませんか？

（本件の原告の一人、ツルコ・ロバーズが正式に宣誓し、証言台にたつて、以下のように証言した。）

主尋問

原告代理人からの質問

裁判長： 私の言っていることがわかりますか？ ロバーズさん。彼女は理解していますか？

証人： はい。

Q： ロバーズさん、お名前を言っていただけますか？

裁判長： ロバーズさん、よく聞こえるように、大きな声で話して頂けますか？

A： ツルコ・ロバーズです。

ヘイグッド代理人： この証人を少し導く必要があるかもしれません。

裁判長： 異議がなければ結構です。

Q： あなたは、オーレン・カービィ・ロバーズ氏の未亡人ですね？ 肯くの

ではなく、「はい」か「いいえ」で答えて下さい。ロバーズさん。

A： はい。

Q： あなたがカーヴィ・ロバーズ氏と結婚したのはいつですか？

A： 約3年です。

裁判長： 彼女の声の大きさは十分ではありません。

ヘイグッド代理人： 大きな声で話して下さい。ロバーズさん。

A： 約3年です。

Q： あなたは、彼と3年前に結婚しましたか？ 彼の亡くなる3年前という意味ですか？

A： そうです。

Q： あなたは、彼と1956年のいつか結婚したんですね？

A： はい。

Q： 少し前から、あなたのテーブルに座らないでうろちょろしている小さな子は、誰ですか？

A： 私の息子のドナルドです。

Q： あなたの息子のドナルド？

A： はいそうです。

Q： 彼は——

ヘイグッド代理人： すみません。訂正します。

Q： この同じ法廷で私たちが裁判を行った1年前のことを覚えていますか？

A： はい、覚えています。

Q： その裁判の被告人、極東建設サービス社は、あなたの夫の死に対して何か支払いましたか？ 彼らはあなたにお金を少しでも払いましたか？

A： （無回答）

Q： ロバーズさん、極東建設サービス社は、あなたの夫の死に関して少しでもお金を支払いましたか？

A： いいえ。

Q： 極東建設サービス社の保険会社である、アメリカ外国保険協会、あるいはホーム保険会社は、あなたの夫の死に関して少しでもお金を支払いましたか？

A： いいえ。

Q： 彼らはドナルドさんに何かを払いましたか？

A： いいえ。

ヘイグッド代理人： 質問は以上です。

裁判長： マクレランさん、どうぞ。

反対尋問

被告代理人からの質問

Q： ロバーズさん、アメリカ合衆国政府はあなたにお金を支払いましたか？

ヘイグッド代理人： 異議あり。裁判長、本件と無関係であり、不適切な質問です。

マクレラン代理人： 裁判長、お金を払っている人についての質問ですので、原告が始めた内容に関する事です。

ヘイグッド代理人： 裁判長、これは、この女性の夫を死亡させた不法行為者が負っている債務の取立を執行するための訴訟であり、債務については判決がでています。これは、判決の支払いをするように保険会社に強制するために、保険会社に対して起こされた訴訟です。これを考慮すると、先ほどの質問は無関係であり不適切なものです。

裁判長： 質問を許可します。

Q： 誰かがあなたにお金を払いましたか？ ロバーズさん。アメリカ合衆国政府はあなたにお金を払ってきましたか？

A： はい。

Q： 毎月？

A： はい。

Q： この訴訟は、アメリカ合衆国政府があなたに提起するように求めたので提起したのですか？

ヘイグッド代理人： 裁判長、再び異議を提起します。

裁判長： 異議を認めます。

マクレラン代理人： 質問を取り下げます。

Q： ロバーズさん、先の裁判以来、極東建設サービス社からその判決で決定した分を回収するために何らかの努力をされましたか？ 判決の結果を回収するために極東建設サービス社の代理人のだれかと接触しましたか？

裁判長： (沈黙の後) ロバーズさん、質問は理解しましたか？

証人： 誰かの助けが必要です。

裁判長： 通訳に入廷と援助を依頼しますか？

マクレラン代理人： おそらく私たちにはしばらく休憩が必要なようです。

裁判長： はい。休廷を希望されるのであれば、約10分間休廷します。

裁判長： 陪審員の皆さん、裁判所から皆さんに注意があります。皆さん同志、あるいは、他の誰かと、この事件に関する事について意見を交換してはなりません。この事件が皆さんに最終的に提出されるときまで何の意見を形成してなりませんし、新聞でこの件に関する事を読んだり、関連するコメントをラジオで聞いたりしてなりません。これらは皆さんの義務です。10分後に戻して下さい。

（裁判所は、1965年10月26日午前10時18分に休廷し、同日の10時44分に再開した。その際に、同じ人が出席したのに加えて、通訳が参加した。）

裁判長： すこし休憩に長く掛かりました。何があったのかわかりませんが、特段理由がなければ、速やかに始めたいと思います。ヘイグッドさん、この証人のために通訳に参加頂く予定です。よろしいですか？

ヘイグッド代理人： はい。裁判長。

裁判長： わかりました。タケガキさん、右手を挙げて、宣誓をしていただけますか？

（通訳は、彼の公的責任を果たすことを宣誓した。）

（証人ロバーズさんが、証言台にもう一度立った。）

反対尋問（続き）

Q： ロバーズさん、もし覚えていたら、休廷前に私が行った最後の質問、前の判決に基づいて、FECONからお金を回収しようと何らかのことをしましたか、についてお答え頂けますか？

A： （日本語での回答）

裁判長： それが答ですか？

通訳： 彼女は、何かがやってきたと言っています。

裁判長： 彼女は、FECONの意味を知っているのですか？

通訳： （証人と話した後で）はい。彼女は知っています。

Q： そのためにどのようにしましたか？

通訳： もう一度お話し頂けますか？

マクレラン代理人： 「そうするためにどのようにしましたか？」とお聞きしました。

Q： この判決の結果を回収するためにどのようにしましたか？

A： （日本語での回答）

通 訳： 彼女は、それを委任したとっています。

マクレラン代理人： 一人称を使って下さい。

A： 私はそれをヘイグッドさんに委任しました。

裁判長： タケガキさん、書記官にあなたの声が聞こえるようにもう少しこちらを向いて頂けますか？ そのほうがよいと思います。

Q： その時、ロバーズさん、あなたはホーム保険会社の保険証券を持っていましたか？

ヘイグッド代理人： 異議あり。主質問の範囲外の質問であり、本件において重要ではなく、無関係なことです。

裁判長： 異議を認めます。

Q： 今回または今回に限らず、ホーム保険会社あるいはAFIAと何らかの契約をしたことはありますか？

A： いいえ。ありません。

マクレラン代理人： 結構です。以上で質問を終わります。

裁判長： 再主質問はありますか？ ヘイグッドさん。

ヘイグッド代理人： いいえ、ありません。裁判長。

補充質問

Q： ロバーズさん、ドナルド・ロバーズ以外に子どもがいたことがありますか？

A： ありません。

裁判長： ありがとうございます。ロバーズさん。

マクレラン代理人： すみません。裁判長、よろしければ、今のご質問に関連してもう1つ追加で聞きたいのですが――。

裁判長： よろしいです。

再反対尋問

マクレラン代理人からの質問

Q： ロバーズさん、あなたの夫のロバーズさんの遺産はこれまでにどこかで検認されましたか？ そして、遺産の相続者は決定されましたか？

ヘイグッド代理人： 裁判長、異議があります。主質問の範囲外の質問ですの

で異議を申し上げます。

マクレラン代理人： 私は裁判所自身がこの質問を先に行ったと考えます。

裁判長： 質問を許可します。

Q： ありがとうございます。質問をくりかえします。あなたの夫、ロバーズ氏は、これまで、裁判所によって遺産の検認を受けたり、相続人を決定されたりしていませんか？

A：（日本語での回答）

マクレラン代理人： 答は何でしたか？

通 訳： いいえ、わからないそうです。

裁判長： 一人称を使って下さい。

通 訳： いいえ、わかりません。

Q： あなたの知っている範囲で、ロバーズ氏は他に家族を残していませんか？

A：（通訳を通して） いいえ、知っている限りはいません。

Q： あなたは、彼がアメリカの何州から来たか知っていますか？

通 訳： 何州？

マクレラン代理人： はい。

A： ワイオーミング。

Q： ワイオーミング？

A：（英語で）はい。

マクレラン代理人： 結構です。ありがとうございます。以上です。

裁判長： ありがとうございます。ロバーズさん。

（証人ツルコ・ロバーズは、証言台を離れ、原告席に戻った。）

続く（以下、本誌第22巻第2号掲載予定）

